

東京ユニバーサル・フィ
ルハーモニー管弦楽団

(第25回)

メンデルスゾーン生誕200年を記念して音楽監督の三石精一が3つの分野の代表曲をすべて暗譜で振った。幕開けは序曲《フィンガルの洞窟》。メンデルスゾーンの卓越した写生手腕がよく再現され、主題拡大のテンポも爽快、その上に重ねられる木管には生命力が宿り、かの景勝が目に見えかぶかのように澆刺とした演奏だ。2曲目は川島成道をソリストに迎えたヴァイオリン協奏曲。残念ながら音の肉付きが薄く、スコアの把握がいま一息らしいソロは恣意的になりがちではあったが、指揮者

は巧みにまとめあげていた。よい資質を持つヴァイオリニストだけに次回に期待。後半は交響曲第3番《スコットランド》。冒頭のもの悲しい主題は聴く者を一気にスコットランドの古城に誘う。だが、けっして暗鬱な情景ではない。オーケストラの響きが清冽で音楽に脈拍があり旋律もよく歌われるのでロマンティックな雰囲気は漂う。第2楽章はきわめて前進的。木管の主題も軽快かつユーモラス。アダージョ楽章では両主題の対比感も鮮やかだ。フィナーレでは弦が推進的テンポで刻まれ、途中の各主題もきびきびと現れては消える。気がつけばもうコーダに達し、圧倒的高まりのうちに結ばれていた。4月10日東京芸術劇場●萩谷由喜子